

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：文学と芸術

部会長名：木下資一

作成者名：木下資一

概要（2000 字）

1.開講科目

平成 19 年度の『文学と芸術』教育部会は、前期に「日本の文学」（4 コマ）、「言語と文化」（1 コマ）、「芸術と文化」（3 コマ）、「伝統芸術」（2 コマ）、「世界の文学」（1 コマ）、夜間主コース「文学と芸術 B」（1 コマ）の合計 12 コマ、後期に「日本の文学」（3 コマ）、「言語と文化」（2 コマ）、「芸術と文化」（2 コマ）、「伝統芸術」（3 コマ）、「世界の文学」（2 コマ）の合計 12 コマを担当している。関係研究科は、国際文化学研究科 6 名（前期・後期各 1 コマ担当）、人文学研究科 7 名（半期各 1 コマ担当）、人間発達環境学研究科 5 名（半期各 1 コマ担当）の 3 研究科で、総計 19 名が前期・後期合計 24 コマを担当している。

2.授業内容

各教員が各自の問題意識と専門分野を踏まえ、学生たちの幅広い関心に応えつつ、現代人にふさわしい文学や芸術の教養・知識を深めることを目的とした多様なメニューを提供しようとしている。以下、アンケート回答があったものを中心に、その内容を紹介する。

●「日本の文学」

- ① 近世前期の文学と思想をテーマとし、近世社会における読み書き、近世前期の出版文化史、近世における古典享受、近世における儒教と仏教などを講義した上で、仮名草子、西鶴の浮世冊子、近松と人形浄瑠璃、元禄期の俳諧、大阪近郊在郷町の文化などについて講義。
- ② 日本の近代文学の成り立ちと展開を、幕末から自然主義まで概観。
- ③ 中世の怪異や変化、寺院縁起、信仰などをめぐる説話を取り上げ、それらを成立・展開させる社会状況や世界観、思想などについて講義。

●「言語と文化」

- ①現代日本語の特質について、世界の諸言語と比較して講義。
- ②日本の文字・文字文化の特質について講義

●「伝統芸術」については、書道芸術、歌舞伎、民族音楽などをテーマに講義。

- ①世界の諸民族の多様な音楽文化をめぐり、音楽がどのような様相を示し、認識され、伝承されているか概説。
- ②次第に身近なものになってきている歌舞伎について、その歴史・構造・演目などを紹介し、その面白さや芸術的価値について講義。

●「世界の文学」

- ①映像文化論。映像文化についての基礎知識を教授した上で、芥川龍之介や夢野久作などの小説を原作とした映像作品を比較、その表現方法の差異などを講義。

●「芸術と文化」

- ①19 世紀までの芸術音楽の基盤を理解した上で、音楽の現代の始まりと言われるドビュッシー以降の音楽における音響構成方法（音楽語法）の変遷を講義。
- ②舞台作品の「制作」と「受容」について、近代都市の劇場建築や文化産業に焦点を当てながら、多角的に考察する。具体的には、モーツァルトのドイツ語オペラ《魔笛》の上演状況を事例にとり、諸資料を用いて講義。

### 3.教育方法の工夫

以下のようなアンケート回答を得た。科目の性格上、視聴覚機器を活用した授業が行われている。

- ①毎回テキストと関連資料を載せたレジュメを配布し、解説する。視聴覚資料を積極的に活用し、理解を深める。
- ②情報機器を活用する。
- ③視聴覚機器を活用する。
- ④即時アンケートにより、適格性判断方式を採用
- ⑤テーマに沿った映像、音声資料の活用。参考書の指示。

### 4.課題・展望

- ①教員アンケートからは、教育効果をめぐり、あったとする者、そうは思わないとする者が5：3であった。あったとする者の根拠は、答案やレポートを見て判断されたものが多く、またそうは思わないとする者は、授業評価が4以下であったことを根拠としているようである。
- ②学生の授業評価を見ると、非常に授業に関心を持ち、面白かった者とそうでない者との差が極端に出ているようである。古典の現代語訳をつけて欲しいなどという要求をする者もある。学生の関心の有り様や学力差を勘案した授業方法の工夫が必要である。
- ③文学や芸術は、嗜好の差や読書量の差がその理解や関心の持ち方に直接的に影響する分野である。文学や芸術の教養は、豊かな精神生活を送るためにも、良き市民として生きていく上でも、欠かせない人間の文化である。授業を通して、多様な文学や芸術に触れたことで、大いに満足したことを述べる学生も多い（期末試験答案・授業アンケート）。受講人数の問題や教室環境の問題はかなり改善され、喜ばしいことであるが、今後更に多様な学生のニーズに対応するためにも、より多様な授業メニューの提供ができることが望ましいであろう。

様式2（続き）

**項目・観点ごとの記述**

基準5 教育内容及び方法

5-1-②： 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

（観点到係る状況）はい8名（アンケート回答のあった教員全員）

根拠資料

- ①シラバス、授業中に提示したスライド、映像資料。
- ②シラバス、授業中に配布したプリント。

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

（観点到係る状況）はい8名（アンケート回答のあった教員全員）

根拠資料

- ①シラバス、授業中に提示したスライド、映像資料。
- ②シラバス、授業中に配布したプリント。

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。

（観点到係る状況）殆どの教員の授業でなされている〔はい6名・いいえ2名〕

根拠資料 「はい」のもの

- ①シラバス（課題指示）
- ②自主的にさまざまな言語について調べてきたことを説明させる課題（試験問題）

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。）

（観点到係る状況）対応している所もあるが、授業形式には工夫の余地がある。

根拠資料

- ①一律に数十名から二百名を超える学生を対象にした講義形式の授業がされている。
- ②TAは活用されている。

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。  
(観点に係る状況) いいえ

根拠資料

シラバス。

各教員の講義における工夫にまかされており、組織的な対応はされていない。

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。  
(観点に係る状況) はい8名(アンケート回答のあった教員全員)

根拠資料

①答案

②答案・アンケート

③答案・レポート

④答案・出席簿

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

(観点に係る状況) 上がっているとの回答5名、そうは思わないとの回答3名。

根拠資料

①上がっているとの回答-期末試験の答案、レポート、授業評価などからの判断

②そうは思わないとの回答-授業評価が4を下回っている、など

基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言(例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。)が適切に行われているか。

(観点に係る状況) ある程度対応している。

根拠資料

シラバス。

教員のホームページ URL や、電子メールアドレス、オフィスアワーの時間が紹介されている。